

「子母澤寛文学賞」【佳作】

「母さんと鮭と海」 滋賀県 広瀬智子

「死んだら海にまいて、後生だから」

病院のベッドのうえで、「ちょっとジュース買ってきて」と言うのと同じくらいの気安さで、母さんは口にした。

「——海？」

やぶからぼうに。

「私は千波<sup>ちなみ</sup>だから」

こちらの困惑をものともせず。

「私のお墓の前で泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかいません 千の波になって——流行りには便乗しようと思ってね」

母さんは、屈託のない笑みを見せた。

「それより、あんた包丁使い下手ねえ。ゴツゴツしてて、じゃがいもかと思ったわよ。これじゃあお嫁にいけないわけだ」

言葉とはうらはらに、三切れ目のリンゴに勢いよくフォークを突き立てる。

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

母さんは包丁を持たない人だった。それで私が得したことと言えば、西瓜を叩いて割らせてもらえたことくらいである。（曰く、西瓜切る可からず。どうせ誰かの受け売りに決まっている。）もっとも、包丁を握っていたら母の結婚が上手くいったとは保証できない。

シャクシャクとりんごを噛む音だけが、午後の静かな病室に響く。

「こんなときさ、レモン哀歌の、あれなんていう人だっけ、あんな風に愛妻家の旦那が果物差し出してくれたらねえ。娘じゃねえ」

口が動くうちはまだ大丈夫という娘の予測は見事に外れた。たったひとつの遺言めいた言葉を口にして一月も経たないうちに、母さんはあっさり逝った。初夏の風ひとつない日に。

あの日もちょうどこんな季節だった。そよとも風の吹かない幼稚園の帰り道、母さんに手をひかれながら、私は聞いた。

「こいのぼり、たいくつそうだね」

「風がないからね」

「風ってなあに？」

なになに病を発症する年頃である。

「目に見えない食べ物のこと」

次の日、気持ちよさそうに泳ぐこいのぼりを指して母さんは言った。

「向かい風をこわがったらだめよ。思い切り口を開けておなかに風を入れなくちゃ」

「目に見えなくてもね」

小学二年のとき、へその緒をおうちの人に見せてもらうという宿題が出た。母さんは露骨に迷惑そうな表情をして、引き出し中をひっかきまわした拳句、茶色くかぴかぴに乾いたものを取り出した。へその緒とは、想像よりずっと長いものらしい。

「きゃあ！」

うら若き女性教師は悲鳴をあげた。実にへびの抜け殻だったのだ。以来、へび女というあだ名を付けられたのは言うまでもない。

母さんに苦情を申し立てると、カッカッカと笑い飛ばされた。

「笑い事じゃないよ」

「へびの抜け殻持っているとお金がたまるのよ？」

母さんは胸をはったが、我が家はつねに緊縮財政であった。

「へその緒どこやったの？」

不安がる私をよそに、母さんは言い放った。

「千絵、昔のことをいつまでもグズグズ引きずってるようじゃね、モテないぞ」

次の年、今度は、赤ちゃんのときの写真を持ってくるという宿題が出た。

「ねえ、写真は？」

「写真なんてなくても、千絵は母さんの目の前にちゃんという。それで十分」

母さんの論点はいつも少しズレていた。

運動会に来て音楽会に来て、ビデオはおろか、写真一枚撮ろうとしない母さんに、私は疑問を覚えはじめた。

「ねえ、どうしてビデオとか撮らないの？」

どこの家庭でも、そういう役はお父さんであったが、うちは母さんしかいない。それなら母さんがするべきだ。

「撮ることに集中していると、千絵のがんばってる姿、見逃しちゃうからよ。母さんはね、記念に残すより、その瞬間を胸に焼きつける派なの」

「そういうもの？」

「そういうもの。そんなことよりお腹すかない？ チャンチャン焼きにしよう？」

料理嫌いの母さんの唯一の十八番は、鮭のチャンチャン焼きだった。

「チャンチャンと簡単に出来ておいしいわ」

作るたびにそう言った。ホットプレートで、きゃべつ・玉ねぎ・にんじん・鮭を炒め、とろけるチーズをのせるだけの品は、実際失敗のしようがない。

「鮭はね、海へいっても、必ず生まれた川に戻ってくるのよ」

これもチャンチャン焼きのたびに聞かされた。前にも聞いたと言わなかったのは、娘なりの気遣いだ。人は、だれだって繰り返したくなる話がある。

母さんは北海道の郷土料理をお腹がくちくなるまで食べながら、しかし、こうも言うのだった。

「わたし、内地から出るつもりはないわ」

と。

まったく矛盾している。母さんは二十二のとき故郷で結婚できない人の子を産み、本州へ渡って以来、一度も北海道に帰っていないようだった。鮭とは正反対に。

「そろそろ、四十九日過ぎたでしょ？ ちゃんと納骨してあげないと、お母さん、行くところへも行けないわよ」

「ええ」

「総務の森ちゃんなんてね、三姉妹で力を合わせてご両親のお墓買ったんだって。えらいわよねえ」

森さんは昨年相次いで両親が急逝していた。

職場のおばさんがお節介で独善的なのは、ある種の老化現象だ。だれにも止められない。「そういえば、この間からの墓泥棒ね、イノシシだったんだって」

町役場はゆりかごから墓場まで住民のお世話をするのが仕事だが、最近墓荒らしの苦情が増えているのだ。

（お墓に入っても成仏できてないじゃない）

私は心の内で毒づく。

確かに、うちへ帰れば、小さな白い箱に収まった母さんが、テレビの横の棚でちょこなんとお出迎えしてくれる。それは、私にとって忠実な愛犬に出迎えられるくらい自然なことだ。と同時に、箱の中の母さんを見るたび、私はじりじりと圧迫されてもいた。やり残した夏休みの宿題のように、あるいは、ダイエットは明日からと体重計に乗るのを引き延ばしているように。

海洋散骨——昼休み、私は、右手にスマートフォン、左手にコンビニのサンドイッチを手に、ため息をついた。

母の遺言を少々安請け合いしてしまった。人骨を海にまくというのは、そうたやすいことではない。

海洋散骨にはしかるべき手続きが必要、とある。遺骨を粉末状に細かく砕くのも、個人がすると、遺骨破棄罪とやりにひっかかるようだ。昨今では、こういうこともビジネスになるのか、粉骨作業から船の手配までを一括五、六万円で（それが安いのか高いのか見当もつかないが）請け負う業者もあるらしい。自然へ還ろう、自然葬のススメ等、検索画面上にはそれらしき言葉が並んでいる。

「なんだ、ここにいたのか」

顔を上げれば、同じ課の高橋さんだ。気安く話す間柄ではなかったし、およそ接点がない。

「お母さん、大変だったね」

「いえ、お気遣いなく」

職場にプライベートを持ち込むのは、私のやり方ではない。

「いつもお昼ひとり？」

大きなお世話だ。

「ひとりの方が落ち着くんです」

強がりではなかった。「ごはんを皆で食べればおいしいね」なんて小学校で教えるのは眉

唾だ。ひとりでも皆でも味は変わらない。ひとりの方が、かえってよく味わって食べられるくらいだ。

ヘビ皮を持っていればお金がたまると母さんはうそぶいていたけれど、母一人の不安定な稼ぎでは食べていくのもやっとだった。だから私はせっせと勉強し、地方公務員になった。

お給料をすべて自分の洋服や休日の娯楽に費やせる境遇ではなかったし、仕事にやりがいとやらを求める質でもなかった。

唯一の楽しみは、お昼休憩の小一時間、公園のベンチでのんびりサンドイッチでもつまむことくらいである。

片田舎の役場には、同じ釜の飯を食らうという感覚が根強く残っている。上司のうちはたいてい豪農で、お米など売るほどあるからといって、職場にどっさり持って来ている。正午きっかりに炊き上がるようタイマーをセットしておき、お昼は皆でこのご飯をいただく、というのが伝統になっていた。米を炊くのは新入りの女子職員の仕事だということも、また。

「中川さん、ご飯炊いといてね」

課長は当然のごとく言った。が、私には理解に苦しむことだった。ここは役場だ。職員の私用のために、血税で毎日電気を無駄遣いしてもよいのだろうか——思ったことは何でも聞かすにはいられない私は、課長に率直な疑問をぶつけた。

課長は珍しい生き物を見るかのような目付きを私に向けた。

「そ、そっか。じゃあ、他の人にやってもらうよ。よかったらご飯食べて」

「自分で持って来ていますから……」

「中川さん、これ、職員名簿」

「どうして本人の許可なく住所を載せたりするんですか？」

「年賀状書くときにあった方が便利だし、皆、仲間じゃない？」

「職場のチームワークと個人情報の管理は別問題です」

課長はさらに困った顔をした。

私の人付き合いは一時が万事こんな調子だった。職場では浮いていたし、業務に関すること以外で声をかけてくる人などいなかった。私はそれをむしろ歓迎していた。役場特有の同調圧力のなかで息を殺しているより、一人の方がさっぱりしたものだ。

「中川さん、税金でご飯炊くのはよくないって、よく言ったね。住所録のことも。みんな思ってもなかなかスパッとさえないからさ」

高橋さんは構わずに話し続けた。

「あ、そういや、おやつがあったんだ」

高橋くんはポケットから、かわいくラッピングしたクッキーを取り出した。今朝、竹中さんが渡していたやつだ。竹中さんは町役場—かわいい。高橋くんとお似合いだ。

「どうして女子って手作りが好きなんだろうね。これなら、駅前のケーキ屋で焼き菓子買うほうが、うまいのに」

高橋くんは、クッキーをひとつかじると、興味をなくしたように、ラッピングをわきへやった。

(高橋さんと案外気が合うかも)

直感した。

徹底した合理主義の母さんに育てられた私は、やっても無駄なことはとことん省く。

例えば、思春期に私が編み物やお菓子作りをしようとする、母さんは、「あんたって、意外とロマンティストなのね。手作りなんて、今時ひかれるわよ？ 餅は餅屋って言ってね、買ったやつのほうが、まだ恋愛成就の見込みありよ」とか言うのだった。母さんの言葉は妙に説得力があった。どう転んでも、娘に編み物を教えたり、一緒に台所でケーキを焼いたりする質ではなかったのだ。

母さんの好(?)影響を受けてさばさばした気性の私は、職場で手作りの菓子を配る女が苦手だった。そうやって配る人の菓子に限って、おいしくなかったりする。よほど腕に自信があるか、よほど想像力が欠如しているかでなければ、菓子などばらまけぬ。たいていは後者の場合が多いから困ったものだ。

気付けば、そんなことを彼に向かって話していた。

「僕、中川さんのお母さんみたいな人、好きだなあ」

高橋さんはケラケラと楽しそうに笑った。

「母さん、海に帰りたいみたいなの」

「海？」

「遺骨を海にまいてほしいって」

「それって、すごくお母さんらしいよね」

「母さんは執着のない人だから。へその緒もなくしちゃうくらいに」

高橋くんは少し考え込んでから、手帳にさらさらペンを走らせ、それをちぎって寄越した。

「海原を遠く渡りて年経とも子らが結べる紐解くなゆめ」

「和歌？」

「そう、万葉集。ガラでしょ？」

高橋くんと万葉集の取り合わせは、母さんと手作りクッキー以上に珍妙だ。

私は高橋くんのお世辞にもきれいとは言えない文字に目を落とした。

「課長んとこのお米にもそろそろ飽きたし、僕も明日からサンドイッチにするか」

断捨離などという言葉が流行る前から、母さんは物を増やさない人だった。物を持つより、捨てる生き方が性に合ったのだろう。したがって、母の遺品整理にはほとんど手を煩わせる必要がなかった。

ヘビ皮が入っていた引き出しの奥に、封筒があった。かなり色が黄ばんでいる。見慣れない写真が一枚入っている。痩せっぽちの少女が、色の黒い男性の腕に抱かれている。背景は船着き場らしい。写真を裏返すと、住所が記してある。北海道——私の祖父だ。

荒波が防波堤に当たっては砕ける。白い発泡スチロールを粉々にしたように。私は思わず目を背けた。3・11の津波の映像を見て以来、私にとって海はおぞい場所だ。

「どちらさん？」

おじさんが、不審そうな目つきで私のことを見ている。

田舎へ行けば行くほど、人の気質は排他的になる。毎日見知った顔の中で生活している人間は、よそ者を必要以上に警戒する。

「あんた、千波ちゃんか？」

おじさんは、依然警戒の色を消さず、近づいて来た。

「いえ、娘の千絵です」

他人の目から見れば瓜ふたつなのだろう。

「へえ、こりゃたまげた。あの勘当娘が子供産んどったとは」

漁村の人間は、思ったことをそのまま言う。よって、口が悪い。

「あんたの母さんの実家は、だいぶん前取り壊されちまったよ」

「そうだったんですか」

「やいっつあん——あんたのじいちゃんな、死んで十年以上経ちよる」

「そんなに……」

私は、肩を落とした。それを見かねたおじさんは、

「まあ、上がんなさい」

と、自分のうちへ招き入れてくれた。漁村の人間は口は悪いが、情に厚い。

「おじさん、漁師さんですよ」

「そうじゃ、この辺りはみんなそうじゃがの」

奥からおばさんが出てくる。

「まあ、千波ちゃん？」

やはり母さんの生き写しなのだ。

「その娘さん」

私が言うより先に、おじさんが説明する。

「それにしても、千波ちゃん、そんな早う亡くなりよって。あの子、若い時分はずいぶん無茶もしよったけど、憎めん子やったわ」

「母がお世話になりました」

私は初めて会う夫婦に向かって、頭を下げた。

「そんな、いい振りこかんでええ」

慇懃無礼は好まれないようだ。

「あんた、何の仕事してるん？」

田舎の人間にプライバシーだの個人主義だの通じない。

「役場に勤めています」

「そりゃあええわ。母ちゃんと反対で、堅実な生き方しとるんじゃな」

本音の付き合いが好まれる土地柄だ。

「そうか、墓を探しにきよったんじゃな。墓はのう——」

せっかちで早合点になるのも老化現象だ。

「いいえ、お墓じゃないんです。母は、骨を海にまいてほしいと遺言しておりまして」

「へえ？」

見たところ還暦過ぎの人間には、少々刺激的な言葉だったかも知れぬ。

「どうしてそんなこと言うんだろうって気になって。もしかして、祖父も海に骨をまいたってことはありませんか」

「それはない。たしかに、やいっつあんは死ぬ間際まで漁に出とったし、海で死ねたら本望じゃ言うてた。けど、隣町の息子——あんたの伯父さんな、ちゃんと墓に納骨しておく」

「そうでしたか——。母がどうして海にこだわるんだろうって」

「やいっつあん、一本釣りの達人やったんや」

おじさんは遠い目をして話し始めた。

今では養殖や巻き網船にとってかわられた漁法も、かつては一本釣りにこだわる漁師がいたという。人の手で一本一本釣り上げるのは効率は悪いが、その日必要な分だけを釣るので資源にはやさしい。一本釣りは、竿に生きイワシを付けて海にたらす。魚の腹がすいているときは、どんどん餌に食らいついて、おもしろいほど大漁となる。逆に、いくらイワシを海にたらしても魚が一向に食らいついてこないときもある。そういうときには、漁をすっぱり切り上げる。つねに、魚の気持ちをさぐりながらの対話である。長年の経験に裏打ちされた勘がものを言う。

「千波ちゃん、墓へは入りとうないんかもしれん。子供の時分は、この辺では一番の跳ねっ返り娘だったもの。お墓みたいな陰気なところより、荒波が似おうとる」

「そうですか」

「その前に、ご飯食べよ？ お腹がすいているといい考えも浮かばん」

おばさんの言うことは正しい。そして、こういうおばさんが作るものは間違いなくおいしい。

おばさんは鉄板を出してくると、野菜と鮭の切り身を無造作に放り込んだ。

「チャンチャン焼きですね？」

「よう知っとるね」

「母がよく作ってくれたんです」

「石狩のもんでチャンチャン焼きが嫌いってことはないから」

「<sup>は</sup>食べ、食べ」

鮭がだいたい色から淡い桜色に変わったら食べごろだ。

しなって甘いきゃべつに玉ねぎ、箸を入れるとほろほろっと崩れるはらみ。

パンさえあればたいていの悲しみは堪えられる、という。母が死んでも腹はへる。「よくこんな時に食べられるね」なんていうのは偽善めいている。お腹のすくのは恥ずかしいことじゃないし、こういうときこそ、心身に栄養を付けなくてはいけないのだ。

「赤ん坊が出来て——あんたのことな、やいっつあん勘当する言うて怒って——口ではそうとしか言えんかったんじゃ。けど、千波ちゃんがほんとに出て行くとはな——」

おじさんはつい昨日のここのように言った。

「きかない人なんは、やいっつあんも千波ちゃんもええ勝負や」

「——なんとなく、わかる気がします」

私は苦笑して言った。

「海にまくっていうのも一考じゃの。鮭がおがる場所だ、悪いところじゃない」

おじさんは、チャンチャン焼きでさらにでっばった腹をさすって、のんびりと言った。

「この辺は海に向かってお盆の迎え火をしよる。海に向かって手を合わせておがみよる年寄りもぎょうさんおる。不思議じゃろ。別に海に骨まいたわけじゃないのにさ」

それだけ人々の生活と海が密着しているのだ。

「それが千波ちゃんの望みなら、叶えてやればいい」

おばさんは、ぐぶっと食後のお茶を啜って言った。

晩秋、私は業者に委託し、母の遺骨を海にまいた。高橋くんが付き添ってくれたのは、心強かった。

沖合の海は、真昼でも、ぞっとするほど蒼く濃い色をしており、あの世を連想させる雰囲気十分にたたえていた。引き返したいという気持ちが一瞬胸をよぎったが、これも乗りかけた船だ。

私たちの他に同船している遺族が三組いた。うち一組は幼い子供連れである。

「なんで、ばあばのお墓はないの？」

なぜなぜ病を発症する年頃である。

「昔むかし、生き物の命はみんな、海から生まれたの。だから、死んだら海に帰るのは自然なことなんだね」

ママは代行業者の受け売りのような言葉をもっともらしく聞かせている。

「ばあばは、元の場所に戻るだけなんだね」

子供の素直な心は、スポンジが水を吸うように、状況を受け入れているようだ。手あかにまみれた困習にとらわれているのはいつも大人の方である。

船を沖合に停止させ、白い手袋をはいた、業者のまだ若い男性が、ビニル袋を肅々と取り出した。人骨は、大きいまま海にまくわけにはいかず、粉になるまで小さく砕く必要がある。これを粉骨というのだが、素人が下手に手出しすれば罪に問われることもあり、すべて業者任せだ。ビニル袋で密閉された粉を見て、男の子は、

「ホットケーキミックスみたいだね」

と邪気のない声で言った。ママは「こらっ」と言って素早く息子の口を押さえたが、私はこういう無邪気な子供がいてくれてよかったとつくづく思った。大人だけだったら、もっとしんきくさい空気になっていたはずだ。

「今年は、秋鮭が大漁らしいですな」

「脂がのってうまいでしょうね」

場の空気が一気に和やかになる。

「私のお墓の前で泣かないでください　そこに私はいません　眠ってなんかいません　千の波になって　千の波になって」

私は空元気で歌ってみたが、船酔いで胸が悪くなっていた。

「そんな気丈に振る舞わなくていいよ」

そのとき、高橋くんがうしろからそっと背中に手を置いてくれた。船が岸に着くまでずっ



とそうしてくれていた。手当てってという言葉が手を当てることからきていることを、このときほど感じたことはない。

「中川、結婚しよう」

母さん、聞いた？

母さんの予測は見事に外れた。

船酔いだと思っていたのは、つわりだった。

「男の子だったよ」

「名前は何がいいかな？」

高橋くんは早くも子煩悩だ。

「拓海は？ 海を開拓する」

「いいねえ」

母さんの好（？）影響を受けた私たちは、結婚指輪もドレスも記念写真もなく結婚した。別にそういうものを大事にしている竹中さんみたいな人を否定するつもりじゃなく、私たちにとっては、毎日のご飯とか、いっしょにテレビを見て笑い転げる時間とか、そういうものの優先順位が高かったというだけのことだ。人はそれを相性と呼ぶのだろう。

「母さんの命日には海を見に行こう」

私は、チャンチャン焼きでさらにでっばったお腹をさすって提案した。

「千絵のお母さんだったら、こう言いそうじゃない？ 私がずっと同じところにいると思う？ 海の水は世界中を巡回しているの。あんたが来年見に来て、私はそこにいないわよ、ってね」

高橋くんが母さんの口ぶりを真似るように言う。

「それもそうね」

「じゃあ、母さんの命日には鮭をたらふく食べるってことで」

「いいね」

「ムニエル、フライ、石狩鍋……」

その方が、母さんの供養になる。そういう供養なら毎年欠かさず出来そうだ。

へその緒をなくした母と、遺骨を手放した娘——それでも私たちは切れない紐でつながっている。